

# 特別賞 三省堂書店賞

## 『チェルノブイリの祈り 未来の物語』

スベトラーナ・アレクシエービッチ著 松本妙子訳

法学部 法律学科 4年 星和也

1986年に旧ソ連(現ウクライナ)のチェルノブイリ原子力発電所4号炉で起きた事故から30年。「チェルノブイリ」は一つのシンボルとなった。この事故を機に普通の市民は「チェルノブイリ人」になって世界から注目を浴びることになる。事故について何十冊もの本が書かれ、何千メートルものビデオフィルムが撮影された。私たちはもうチェルノブイリの事故のことを何でも知っている気がする。

アレクシエービッチによって書かれたこの本は従来の本のように、あの夜に何があって、誰が悪くて、一部の権力者によってどのような決定が下されたのかということの解説書ではない。放射能という未知なるもの、謎のものに触れた人々が何を思い、何を感じたのかを記したものである。決して積極的にその胸中を語ろうとしない人々の口から語られる話は非常に生々しく、時に感情的なものがある。普通の市民から医師や物理学者のようなインテリまで幅広く丁寧に行われた取材からは、私たちが見落としていた事故の本当の姿が浮かび上がる。

本書の最初のエピソードとして事故発生当時、火事に見舞われた発電所の消化活動に当たっていた消防士の妻であるリュドミーラの声が収録されている。正体不明の高濃度放射線に襲われた、愛する夫の体は時間とともに剥離し崩れ去っていった。夫を英雄と崇め、科学の研究対象とする人々に言葉にならない憤りを感じながらも、子供を孕んだ体で無理をしながら夫に最後の別れを告げるまでを克明に語っている。最愛の人との別れを経験した彼女が経験したことを自分の言葉で語れるようになるまでには、どれほどの時間が必要だったのだろうか。それを本書のような文章にするためにアレクシエービッチはどれだけの取材を重ねたのか。まさに本書はドキュメンタリー文学の最高傑作といえるだろう。

著者は2015年にジャーナリストとして初めてノーベル文学賞を受賞している。平和賞と同様に文学賞も受賞者をめぐって多くの物議をかもすが、彼女のときも例外ではなかった。「市民を取材した生の声が文学作品と言えるのか」との批判が数多く寄せられたのだ。しかし、世界中のジャーナリストや作家がなしえなかった、本当の意味での「弱者の声なき声をすくう」彼女の作品は、やはり賞賛に値することが本書を読めばわかるだろう。チェルノブイリ原発事故から四半世紀がたった2011年には日本でも同様に「フクシマ」がシンボルになってしまった。その事故から5年の節目を迎えたこの年にいまいちど本書を手にとってみてはどうだろうか。